

夢に見た奇妙な喫茶店からの雑談

梅田富雄（化工会）

何時であったか、夜明けの3時半ごろ、狭い喫茶店でコーヒーを飲んでいる夢を見ました。どこが奇妙かと言いますと、コーヒーのお代わりをサービスしてくれたことで、なぜかと訊ねたところ、お客さんの皆がコーヒーを飲むたびに1割のストックが積み重なる仕組みになっているようで、ある程度ストックが溜まると突然今日のようなサービスをすべてのお客さんに振舞っているとのことでした。現実には、コーヒーのお代わりができるホテルなどはありませんが、今までこのようなサービスは経験したことはありません。なぜこのような夢を見たのか、兎に角、夢について説明することは出来ないようです。

夢に出てきたこのような考え方は、デパートの還元セールを考え方をサービス業に適用したことになるかもしれません。これらの事例は大げさに言えば、2,3年前にハーバード大学のマイケル・ポーター教授が提唱した共通価値創造論で説明できるように思います。従来の企業の社会的責任の考え方から一歩前進して顧客などとともに共通の価値を創造する伝統的な資本主義から新しい方式への転換の必要性を強調しているものです。夢で見た喫茶店の経営はまさに共通価値の創造を戦略としていると考えることができると思います。最近では、静かでやや照明を落とした雰囲気の中で音楽を聴きながら親しい人びとと寛ぐことができる喫茶店はなかなか見つけられなくなりました。パソコンを持ち込んで仕事をする場所に鳴っている喫茶店も多くなりました。また、コンビニでも挽きたてのコーヒーを安く提供するようになりました。このようなことを考えながら、昔のことを思いだしながら、喫茶店でコーヒーを飲み始めたのはいつ頃だろうか、と想いを巡らしてみました。

少年時代にミルクホールでホットミルクを今でも時おりお目にかかる透明なグラスで父と飲んでいた情景を覚えています。これが喫茶店との関係の最初のように思います。その後は浪人中に、上野と御徒町の間にあった名曲喫茶でベートーベンの第九シンフォニーを聴きながらコーヒーを飲んでいた状況を思い出しました。4年の高島研究室で卒論を準備していた頃に、先生と椎名君とともにミュスカにしばしば行った記憶があります。当時銀座の交詢社ビルには化学工学協会の事務所がありましたが、近くの喫茶店で飲んだデミタスコーヒーのうまさは、格別でした。

社会人になり千代田に入社後は、毎日先輩や同僚とともに昼休みにコーヒーや出掛け仕事の話しをすることが日課になっていました。ミネソタ大学に留学中は当時のアメリカのコー

ヒーのまずさは格別で、2 年間は紅茶で過ごしていました。なお、アメリカのまずいコーヒーはお変わり自由でした。平成に入り筑波大学に移った直後は、専ら夜間の大学院であったため、一人で茗荷谷の駅前にあるコーヒー店で軽食を取るなど、相変わらずしばしば喫茶店に出没していました。千葉工大に移ってからは、時おり喫茶店も行く程度になりました。現在、コーヒーのお代わりが飲める喫茶店は大きなホテルか、銀座ではウエストくらいでしょうか？3月11に東日本大震災当日は、銀座並木通りにある地下のクリスタル・・・という豪華なコーヒーハウスで研究の打ち合わせしていました。それほど大きく揺れることもありませんでした。ここも少し高価ですが、お変わりを飲める、寛いだ空間です。

最近読んだ「事業戦略の教科書」という本にしたようなポジションマップが事例として取り上げているのを見つけました。

価格が高いか低いかの軸とテイクアウト型か滞在型の軸で4象限表示がされており、

コンビニカフェはテイクアウト&低価格、喫茶店やホテルラウンジは高価格&滞在型、

セルフサービスコーヒーショップは低価格&滞在型

とうことです。

最近の朝日新聞朝刊に、特別のコーヒー豆で、サービスするときの価格が紹介された後、

「コーヒー1杯1998円」聞いただけで眠れなくなった という川柳: :かたえくぼ:

が紹介されていました。

我が家では、毎朝コーヒー豆からすべて自動のコーヒーメーカーで淹れ立てのコーヒーを飲んでます。もちろんお代わりは当たり前で、1日に4杯は飲み続けています。この場合は、低価格&滞在型になるのでしょうか。

思い出すままに、コーヒーに纏わる話を書いてみました。

2014年9月25日